

褥瘡ケアにおける経過記録のデジタル化による多職種連携にかかる効果について

－デジタル時代の褥瘡ケア－

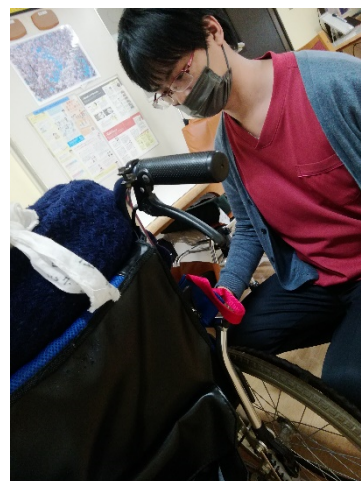
社会福祉法人友愛十字会 特別養護老人ホーム 砧ホーム

小谷野 祐樹

(デジタル 褥瘡 多職種連携)

1. 目的

砧ホームが設置する褥瘡予防対策委員会（以下、褥瘡委員会）は、介護職員、看護職員、管理栄養士、生活相談員、機能訓練指導員が月に一度参集し、利用者個々の皮膚状態をテーマに、看護職員からは処置の経過と現状、管理栄養士からは血中アルブミン値やBMIの変化、生活相談員からは利用者本人やご家族の意向、機能訓練指導員からは座位や臥位の姿勢について報告し、ケアの進め方を評価、検討している。一度の検討で治癒する利用者がある一方で、慢性的に毎月検討に上げられる利用者も一定数みられていたが、皮膚状態は看護職員からの口頭での報告に基づき評価がなされることから、特に臀部の傷など直接、見る機会の少ない職種にとっては机上の検討になりがちで、繰り返される検討に対しこれまで深い介入が出来ずにいた。



他方、近年、施設内ではデジタル化が進み、タブレットを用いてどこにいても記録を入力できるシステム（以下、記録システム）が整備されるようになった。これは会計ソフトから派生した記録システムであり、令和元年度に東京都のICT活用支援補助金を活用しオプションを追加する形で導入したものであった。ケース記録に代表する文字入力をはじめバイタルサインや食事摂取量といった数字の入力の他、排泄の有無や内服確認におけるチェック入力など、事業活動上、必須となるものから記録システムへの移行を進めていたが、記録システムの導入によって新たに可能となった“画像の記録機能”の有効な活用が課題となっていた。

褥瘡委員会における検討上の課題と新たな記録システムの活用上の課題が混在していた。そのため“画像の記録機能”を活用し、褥瘡委員会に置ける多職種間の検討を活性化させ創部の改善を図ることを目的とし実践した。

2. 実践内容

食事や排せつなど、利用者の生活上のデータ入力と管理が記録システムに移行した2020年7月より褥瘡委員会では記録システムを活用したケース検討を開始していたが、ケース検討の中で“画像の記録機能”をルーティンとするには、全職員に“画像の記録機能”の使い方をレクチャーし、かつ定期的に画像を撮ることをルーティン化する必要があった。

まず、施設でデジタル化を推進していた生活相談員と機能訓練指導員が“画像の記録機能”そのものの使い方の手順書を作成し、職員個々にレクチャーを進めていった。その際、皮膚状態だけでなく、個別ケア時の記録にも活用できることを伝えることで、新たな機能の活用に関心を集めた。肝心の創部の画像は、入浴後に介護職員が撮影を行うことし、浴室専用のタブレットを用意して環境を整

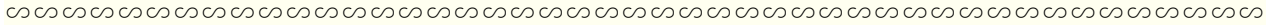
えた。当初は撮影の向きが職員によってばらばらで、褥瘡委員会で検討する際に混乱を招いたが、タブレットに撮影方向を示す表示を添付することで解消した。2ヶ月後の同年9月には、褥瘡委員会での“画像の記録機能”を活用したケース検討が定着した。

3. 結果

既に関いている記録システムの画面から、タブレットを2回タッチすれば必要な画像に辿り着くことができるため、ストレスなく画像を基にしたケース検討が可能となった。特に、蓄積される画像からこれまでの創部の治癒経過を辿ることが出来る様になり、そこにその時々実践してきた対応策を重ねてみることで、各職種においてより細かなケアの評価が可能になった。何より機能訓練指導員にとっては悪化場所に対して正確なシーティングを提供することが可能となり、効率的かつ効果的に専門性を発揮することが出来るようになった。結果として、これまで慢性的に毎月検討に上げられる利用者も徐々に少なくなっていた。

4. 考察と今後の課題

画像を有効に活用することにより、これまで見えなかった情報が可視化されることで、チームにおいてより具体的な検討が可能になる。それぞれの職種においては、より専門性を発揮した実践が展開できるようになり、組織の課題解決力を高めることにつながる。情報力を利用者のQOLの向上につなげるデジタル時代のケアのあり方を、多職種連携の中で体感する実践であった。今後も様々なシステムが加わる事が予想されるため、適宜対応できるように体制を整えていくことが課題になってくると思われる。



<助言者コメント>

高橋 裕子（世田谷区世田谷保健所玉川保健相談課長）
（玉川総合支所健康づくり課長兼務）



この発表では、褥瘡ケアにおける大切な点が2点示唆されています。

1つ目は、褥瘡ケアでは創部の観察と経過記録が重要であり、治療やケアによる創部の状態の変化や治癒の経過を、客観的な、わかりやすい方法で記録するということ、2つ目は、褥瘡の治療やケアに関わる職員が、褥瘡の状態を科学的に正しく理解し、共通のケア方針や目標に沿ってチーム一体となってより良い効果的なケアを実践し、かつ回復の経過を正しく評価できるということなのです。

画像で褥瘡の状態を記録し、ケアに関わる職員が同じ情報を共有できるようにした取り組みは、情報や認識の誤差が解消されるデジタルの強みがうまく活かされています。

また、その情報に基づいて、褥瘡委員会でケアの方針や実施状況、回復状態の評価を行い、役割分担しながらケアの質を高めた取り組みは、チームケアの好事例です。

近年、ケアの現場にICTが導入され、介護職員の事務負担の軽減が進められていますが、ケアの効果を高め質の向上につなげることは、あまり多くは語られていないように思います。

ICTによる情報共有のシステムと、人が知恵を出し合い、よりよいケアを模索する褥瘡委員会の仕組みがうまくコーディネートされ、効果が「見える化」されたことで、職員のみなさんの意欲ややりがいが引き出されていたのではないのでしょうか。

2つの点は、褥瘡以外でも応用できるのではないかと思います。今後も、改善の視点を大切にして、よりよいチームケアを実践していただけることを期待しています。